

大学放浪記 (47)

伊藤信孝

マエジョ大学・客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、筆者が最もうれしい出来事について記す。これまでも既述したように、筆者にとって何に最もうれしく、幸せに感じるかをあらためて記す。言うまでもなく、長年タイに滞在している、或いはさせて頂いていることが基本的に幸せである。しかし、滞在している、或いはさせて頂いているだけでは意味はない。何が目的で、滞在し、させているかについてその目的、趣旨、或いはミッションがあきらかでないという意味は半減する。本人が如何に高い志をもっている、その志が生きる環境がなければその達成度は100%満たされない。もちろんそうした環境は本人の努力と忍耐、強固な意志により、初めて達成されるものであるが、雇用側と被雇用側で完全に条件が一致することはないから、妥協と自助努力が要る。筆者の場合、タイ語は読めないし、理解もできないから、契約書は読まない。いわばめくら印に近い形で署名している。一方には、給料が欲しいわけではないし、働く場所があって仕事できれば基本的にオーケーである。目的は相手機関、相手国になにがしかの形で貢献できればそれでよいのであるが、その目的、ミッションを如何に成し遂げることができるか、また何をもってその達成度を評価するかである。ただし評価とは自分なりに自己満足で終わることではない。しかるべき機関に仕事内容を投稿し、公的に受理されるなどの証明が必要である。言うまでもなく継続的にどのような仕事をし、それが社会的にどのような評価を得ているかは、雇用側にとっても必要条件でもある。余ほどの特殊事情がない限り、雇用採用時に提出すべき書類を提出する必要がある。年齢にかかわらず、提出書類がなしと言う場合は少ない。過去の学歴、資格、専門分野、昇格昇任、各種能力証明書、などそれなりに提出しなければならない。大学の教員の場合、学歴を証明する証明書(学部、修士、博士学位取得証明書)に加えて、最近では最近5年間で3編の学術誌掲載論文が必要である。もちろん複数の閲読者による閲読制度を有する、あるレベル以上の学術誌で無ければならない。学歴については、これまで博士の学位取得証明書のみであったが最近(あるいは大学によりことなるかともおもわれる)では上記に既述したように学士、修士の修了証明書までもが提出すべき規定になっている。さらに助手、助教授、教授のランクにいつ昇格昇任したかについても証明書(なければ個人調書)の提出が求められる。同じ教授のポストであっても、いつ昇格昇任したかで教授としてのキャリアは異なるから、そうした書類の提出が必要と言う事らしい。また、現地大学の教員の場合は、日本と同じように、博士の学位は必携であり、学位がなければ、例外を除き候補の対象にならないのが一般的である。しかし、学位保有者であれば、大学の教員になるのは比較的容易(?)であるが、教授へ

の昇格昇任は極めて難しいと思われる。それは、多くの大学の教員の中でも教授のポストについている数が極めて少ないからである。学科主任、学部長補佐、学部長、研究所長、から副学長、学長と言う大学の中枢を管理する主要ポストでさえも、教授ポストにある人は少ない。なぜか？長年このことについていろいろ考えてきたが、なんとか最近になってその背景、主因がわかってきた。しかし、よそ者の外国人が何を言うか、失礼ではないか、と毛嫌いされ反発を招き、解雇されることも覚悟しなければならない。解雇されれば、ミッションを達成するどころではない。その状況になる、はるか手前で組織の改善どころの話ではなくなる。なんとかこの状況を改善するにはどうしたら良いかと今でも苦労している。

タイのみならず。アジア・コミュニティの発展支援するのが筆者のミッションと設定している。学位取得した優秀な人材を育成し、タイ・オリジナルな製品、有名ブランド製品の創造により、国家経済の持続可能な進展、飢餓と貧困の回避により、地域平和の安定維持をはかることでアジアの発展を促す。地域紛争が生じる原因の一つは飢餓と貧困にあるからである。世界人口は2022年11月で80億を超えたが人口の急増は食料増産を促す必要性を生み出す。ここ10～20年で一人当たりの年間食料供給量は単純計算して400kg/capitaであったが、これは食料の総生産量を世界の総人口で除した数字であり、実際の配分はこの数値より低い。また食していると言って栄養価のある十分な食料を得ていない人口は10億ほどもいる。これらは食料生産が可能な条件が整っていない地域、たとえば灌漑排水設備がないとか、自然条件として農業生産に適していない砂漠地帯であるとかの原因や理由にもよるが、食料の配分がうまく機能していないことにも大きく依存している。食料危機にも似た状況で毎日、多くの命が消えている一方で飽食に浸り、食糧残渣が30～40%にもなっている地域もある。幸い、アジアは資源立国であり、食糧資源を世界に供給できる十分な潜在力を有している。しかし総生産量は多くても、生産物の品質、安心安全を保障するほどの技術、管理は十分とは言えない。急増する世界人口に対処するための食料増産、安心安全な食料生産を保障する技術移転により、アジアを世界の食料庫とし、アジア独自のオリジナル・ブランド食品を創造できる人材の育成が必要であり、それには技術移転とその技術の伝承を可能とする人材の育成が急務である。アセアン経済共同体（ASEAN Economic Community）を中心としたアジア未来農業の達成が重要であることはこれまでも既述した（参照：Nobutaka Ito (2021) Asia Techno Farm Initiative for growing Future Farmers of Asia, Page: 162~177, International Journal on Advances in Systems and Measurements, 2021 vol.14, number 1&2.)

http://www.iariajournals.org/systems_and_measurements/,

http://drive.google.com/file/d/1G9yZlsFATsS_Zt5EtwsnIjeoGIr4Szu_/view?usp=sharing

しかし、プロジェクトの構想が良くても、如何にそれを実現するかと言う”How”が問題である。前に立ちはだかる諸問題の中には知識や技術を移転する対象学生の能力もさることながら、大学と

りわけ授業をする教員個々の、教育に対する熱意 (Enthusiasm)、講義内容の質と量、そのレベル、大学として「どのような人材を育成するか?」と言う意識の共有、統一、価値観が同じでなければならない。これまでも記述してきたが、大学の独法化への移行ですら未だ好まない大学もタイにはある。そうした大学の教員の中には、現状維持を堅持し、あまり教育に熱心でないのではないかと受け取れる姿勢が見られる。例えば、講義を複数の教員で分担するのを嫌うのもその一例である。聞く耳を持たず、自分の講義だから思うようにさせておいてくれと言う姿勢である。他人に見られるのを極端に嫌い、他人、学生、特に同僚から比較評価されるのを嫌う姿勢である。これは「教員自身に自信がない」ことに起因するが、学生からの評価によっては、自らの立場が悪くなるから、学生との接触を指せない、あるいは一緒に講義講義分担することを意図的に避ける行動に走る。このような状況が続くと、教員本人に取っては問題にはならないが、学生にとっては悲劇である。就職についても、あるいは海外の教員の紹介を依頼しても、知名度がないから、道が開けない。かつて筆者の日本の大学教員である知人がタイのバンコクで開催の学会で基調講演を依頼され、来泰することを知り、チェンマイからバンコクに会いに行きたいとタイの大学の先生に話したら、ではタイの会議担当者(教員)に口をきいてやるから会いに行けと言うことで、企画委員会の長にあたる教員に連絡したものの、「貴方など知らない」と言う訳で紹介にならなかったことを記憶している。そこで致し方なく、直接知人に連絡を取り紹介状を作ってもらい、登録費を無料にして頂いた。そのタイの先生とは現在でも良好な関係が続いており、ベトナム、カンボディアでも、そしてもちろんタイでもお会いする機会を持っている。上記のような教員が多い大学では、いくら良い提案をしても、受け入れられたり、採用されたりすることはまずない。個々の教員にとって不都合なことをあえて受け入れ改善することはまずない。最終的には提案した者が仲間外れに会い、講義分担を指せてもらえなくなる。そこまでやるか、と言うところまで、彼らにとっては必至の事柄でもあるらしい。教員自らが勉強する気力もなく、現状に満足している体制では外力なり、外部圧力がない限り、改善は難しい。独法化にスムーズに移行しない原因もここにある。となれば、どうすればよいか。なんとか学位保有者を増やし、既存の教員がこれではだめだと気付くような状況を作り出すのが方策の一つであろう。学位取得に全力を尽くし、学位取得して国に帰ると、そうした気力は消え失せて研究業績は上がらず、政治的管理運営に力を注ぐあまり昇格昇給はままならず、大学としての教授の実質在籍数は極めて少ない。昇格出来ないのではなく昇格したいという気力がなく、またその気力があってもそれに見合う論文数が足りない。現状維持で満足しつつ庭園を迎えるというケースになる場合が多い。頑張っって大学教員になってもいささか寂しい。この状況の改善は極めて難しいが大学、教員がこれではだめだと目覚めるには、そうした現状を正しく見る能力を有する人材を育成する以外にない。すなわち、学位取得後も初心を忘れず、自国の国益と尊厳を保持する人材の育成を推進する、と言うことになろう。筆者は、それ自身、自分らが果たすべき目標、ゴール、あるいはミッションと認識している。したがって人材育成とは、まず学位取得保持者を増やす。具体的には大学教員の質と量の向上を目指す。この意味は教授になる能力を有する人材の育成

と言う意味である。かつての教員養成職業訓練校の大学格上げも近年実施されつつあるからである。

んな中でうれしいニュースが入ってきた、かつての3大学事業参加経験者である優秀な学生で（日本、中国での同事業に参加の経験もあり、もちろんチェンマイ大学が同事業のホストの場合も）司会者や各種プログラムで活躍したひとりである。正確な英語を流ちょうに話し、国境なき医師団に類似の国境なき技師団（？）にも参加し、長い付き合いである。いずれは学位を取得して祖国のために大きく貢献する人物と筆者は期待していた。その期待通り、タイ政府からの奨学金で海外留学し博士号を取得して一時タイに帰国するというニュースである。その彼が「自分の人生に大きな影響を与えた師である筆者に是非帰国時に会いたい」と言ってくれたことに、お世辞であっても嬉しいと大変感動した。

ここで改めて、今の大学に必要なことを再記しておきたい。それは「最近の若者が感動に飢えている」と言うことである。彼らの心に響くものがあまりにも少ないのではないかと常時感じている。これと言ってあまり努力をしなくても欲しい情報は有り余るほど瞬時に集めることができるし、自ら動かなくても、その気になれば容易に大量の情報を容易に得る時代である。対面授業でも教員の話よりスマホとにらみ合っただけの授業のほとんどの時間を費やす。筆記用具は持たず、持ってくるのはスマホのみで、授業に出るのは「出席」の証を作るだけで、宿題、レポートもインターネットから得た情報をコピーして済ませるし、そのようにしてまとめた友人のレポートをそのままコピーして提出する。提出されたレポートの多くに同じ内容（文章も図表も同じ）と言うものが多い。如何に授業中に学生の興味を引くかが重要なポイントになりつつある。授業をする教員側の対応が求められている。既述したように従来の静止画像（写真）スライドを動画に変えるなどの工夫、努力がいくらかでも効果を上げ、記憶に残ることも以前の報告で強調した。上記は一例であるが、要は「感動に飢えた学生に、如何に感動を与えるか」である。3大学事業立ち上げの時にも、ホスト大学の数が増えても自分の大学だけは3～4年に一度はホストを務められる様にしたいと考えていたし、今でもその想いはあるが、世代交代、定年退職と成り、その事業から離れるとそうした精神は伝承されておらず、事業の継続すら危ぶまれる醜態を見せている大学もある。ホスト校になるということは、他の参加大学を招き、自分達の大学がリードしている活動を知らしめる役割を果たす事に他ならない。順番をかわらせてクリアするレベルの事業ホストならば、他にもやりたい大学はあるから譲れば良い。譲られた大学はそれこそ感謝し、勇気づけられ、より真剣に力を注ぐ高い効果を産むことになる。事業展開に大切なことはチーム・ワークで有り、それにはメンバー各自がやるべき事を認識し、情報や役割の重要性を共有してこそ達成できる。事業展開ができない組織に於ける最大の敵はメンバー各自の無気力、無反応、無関心である。現職時代に文系学部で付属施設（研究所）がないので、作りたいとの意向が関係者から示され、他学部も協力することになった。その協力

はこれまでの活動実績を示すことで有り、関係の研究論文リストを提出することであった。しかし、会議の進むうちに、施設の新設を申請して居る当該学部の「長」が、「如何致しましょうか？」と発言されたのを聴いてがっかりした。すかさず、「何をしたいのかは当該学部が色濃く何をしたいかを明確に説明すべきで、何をすべきかと問われるのは筋違いではないか。他学部のわれわれはすでに業績リストを提出して貴学部に協力しているのですから、当該学部から積極的に原案を示して頂き、だから協力して欲しい」というべきではないかと切り返したのを記憶している。やる気の無い者に支援をするお人好しは余ほどの理由が無い限りあり得ない。同じように、あるいはそれ以上にやる気があってこそ評価され、採択、予算配布となるのである。全面的に他力本願で事業や設備の新設が叶うことは希有である。このような空気に学生は敏感に反応するし、感動も覚えないからモチベーションも上がらない。優秀な成績の学生確保を多くの大学が望んでいるが、優秀でない学生を優秀な学生にするのも教育である。

学位取得も取得するのが最終目標であってはならない。日頃学生達に言っているのは「学位は自動車免許証と同じで、大学教員や研究者、技術者として身を立てるには必携の資格であるが、取得する事が最終目標ではない。取得して人類や社会に貢献できる仕事をする事がより大切である」と。学位は研究をコンダクトできる能力を証明する資格認定書でもある。多くの学生のみならず、大学教員の中には国際交流事業が研究論文の発表の場で有り、論文作成や投稿だけが事業の目的であるかの如き認識の人が多いいのは残念である。

学位を取得して母国に帰った留学生の全てが、最終目標を達成したと勘違いして、教育・研究活動がおろそかになる。帰国を待って用意される学部長補佐などのポストが大学での学術活動の障害になっている。なぜなら上記ポストにより研究活動に割く時間が少なくなり、かといってそうしたポストを拒否するほどの勇氣は無い。なぜならそうしたポストは任命された本人にとってはそれなりにメリットがあるからである。そして学術活動から徐々に遠ざかる、そして何時の間にか年を取り、定年を迎える。本人はそれでも自己満足かも知れないが、それが大学、学生、社会にとって本当に良いことであろうか。これまで高い評価で見て来たタイ人留学生がそうした轍を踏まないで欲しいと願っている。もちろん彼がそうした人物であろう筈が無いと確信しているが・・・。彼の他にももう一人学位取得の最終段階にある卒業生がいる。また、もう一人は半年後に海外の大学の博士課程で受け入れて貰える状況にあると聴いている。大学はもちろん、政府機関の研究機関でも、予算を付けて、学位取得を促す気運にあるが、研究プロジェクトの申請においても誰がどの様な研究をやっているのか、を知る事も難しい。研究教育に活発でない大学の教員自身が自らそうしたことを自ら広く知らせない、知らせたくない、知られたくないと言う考えのようである。ひとりで誰からも干渉されること無く我が道をいくと言う姿勢では学生も可哀想である。それならばそれで学術誌に活発に研究論文を発表し、自らの活動を示す事をすれば良いのだが、それもしない。知らせを受けた彼の帰国時には、か

つての指導教員を表敬訪問 (Courtesy visit) し、かつての指導教員共々、昼食なり夕食に招いて本人の現状と最近の留学先の国情、教育研究、話題、最新技術動向などの情報入手の機会としたいと想っている。しかし、それだけにとどまらず、せっかくの貴重な情報入手の機会であるから。学科、学部レベルにアナウンスして、学位取得を目的とした海外留学経験談を話してもらおう場を作るとさらに良い。同じタイ人にとり学位取得という同じ目的を目指す後輩にとってはまたとないチャンスである。しかしそうした企画のアナウンスはあまり見ない。海外留学の希望がないのか、興味がないのか、あるいは何のために学位を取得する必要があるのか、教員サイドからもそうした機会を作る必要性も感ぜず、全く無関心で人ごとのように考えているかにも見える。ひょっとすると学位取得という言葉さえ無縁に思っている学生や教員が大半ではなかろうか。このような機会を作るという発想は大学、あるいは教員サイドから積極的に仕掛けないと進まない。大学がリーダーシップをとって学生の啓蒙を図るという行動をとらなければ前進はない。なぜそうした企画立案への行動が、大学や教員サイドから出てこないのか、これがまさしく無関心と言うことである。勉強における能力が高くても、そのポテンシャルを利用して、オリジナルなアイデアを引き出せなくては無意味である。そのままの状態自己満足（あるいは気づかずに）していれば、常に他人、或いは他国の技術や製品を購入し続けなければならない。この状況が長く続くと国の安全保障に影響が出てくる。その果てに、種々の既成や制裁により、他国に依存、従属しなければならなくなる。自前の技術、自前の人材育成がなければ安全保障は維持されない。金があっても相手側が売らない、売りにたくない、と言えば金はまさに紙屑である。否が応でも自前で育成、開発、想像しなければならぬものが基本的にいくつかある。それらを達成する人材育成はもっとも重要で、かつこれも必要である。これも大学の戦略、政策に大きく関係する。大学を良くしようとか、将来の良き人材としてどのような教育をするか、と言う目標もないのでは進む方向すらわからず、示されていないければ、もはや大学の存在意義も、社会的ニーズもないに等しくなるから、あとは衰退、凋落の一途しかない。

かつての留学生の帰国の報を受け、胸を弾ませ、かつての指導教員にも連絡を取り、夕食会も含めた万全の歓迎祝賀を準備していたが、長年の海外滞在で自国の自動車免許証の有効期限が切れ、せっかくの再会の機会が前日になってキャンセルとなり、再会は後日となった。残念ではあるが、これも3年にも及ぶコロナ禍が主因の平常な生活への不愉快な不都合である。次回後日の再会を待つしかない。